

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

|   |                    |                        |       |
|---|--------------------|------------------------|-------|
| 博士の専攻分野の名称<br>(Major Field of Ph.D.)  | 博士 ( 文学 )<br>Ph.D. | 氏名<br>(Candidate Name) | 早瀬 博範 |
| 学位授与の要件   | 学位規則第4条第1項該当       |                        |       |
| 論文題目 (Title of Dissertation)<br>フォークナーの作品に見る階級意識<br>—一人種とお金が織りなす南部格差社会—   |                    |                        |       |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee)  |                    |                        |       |
| 主 査 (Name of the Committee Chair)   |                    | 教授                     | 大地 真介 |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)  |                    | 教授                     | 吉中 孝志 |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)  |                    | 教授                     | 今林 修  |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)  | 文学研究科・名誉教授         |                        | 田中 久男 |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)  |                    |                        |       |
| <p>本論文は、アメリカ文学キャノンの代表的作家ウィリアム・フォークナー（1897-1962）の主要作品を取り上げ、作品中で描かれるアメリカ南部への資本主義の浸食と人種・階級問題の複雑な関係を解き明かす研究である。従来フォークナーの作品は、地域にからまる人種問題に力点を置いて研究されがちであったが、本論文は、特にフォークナーや登場人物たちの階級意識に着目することによって新たな視点や見解を提供している。</p> <p>論文は、序章と終章に加えて6章からなる。まず、第1章『響きと怒り』における階級意識の犠牲者たちにおいては、『響きと怒り』の没落貴族コンプソン家のクエンティンやジェイソンやベンジーが、ディルシー、シーゴッグといった黒人たちとは対照的に、階級にとられるあまり苦境に陥っていることを詳細に分析している。</p> <p>第2章『アブサロム、アブサロム！』における階級闘争』では、『アブサロム、アブサロム！』の主人公トマス・サトペンが、資本主義の権化となって大農園主にのし上がるも、南部の階級制度の根幹にあるパターンリズムに関する「無知 (innocence)」によって破滅していると論じる。</p> <p>第3章「プアホワイトたちの階級闘争」においては、貧乏白人 (poor white) のスノープス一族を描いたスノープス三部作、すなわち『村』、『町』、『館』を扱う。スノープス一族を代表するアブ、フレム、ミンクがそれぞれ南部階級制度、資本主義、パターンリズムにどのように関与しているかを比較検証することにより、スノープス三部作の意義を明らかにしている。</p> <p>第4章『行け、モーセ』と『墓場への侵入者』における「古き良き南部」と階級の揺らぎ』では、『行け、モーセ』と『墓場への侵入者』の二作品を一続きの作品とみなしたうえで、黒人奴隷制度が基盤の旧南部体制が崩壊していくさまを丁寧分析し、黒人ルーカス・ビーチャム、少年チャールズ・マリソン、女性ユーニス・ハバシャムといった社会の周辺にいる人たちが体制を揺るがしていることを指摘する。</p> <p>第5章『エルサレムよ、我もし汝を忘れなば』における反資本主義的構図』では、大恐慌を舞台にした『エルサレムよ、我もし汝を忘れなば』において、経済的困窮の中で苦悩するシャーロット・リトンメイヤーが唱える「愛の哲学」が、神も愛も消滅させた資本主義社会への反抗の表れであることを論証している。</p> <p>第6章「フォークナーとニューディール政策」では、短編小説の「誇り高き男たち」と「主のための屋根板」を徹底的に読み直すことにより、「両作品は、南部農民の誇りや尊厳を称賛しており、ニューディール政策を批判している」という定説を覆す。フォークナーが、心情的には、南部の美德を</p> |                    |                        |       |

踏みにじる同政策に反対の立場であったが、作家としては同政策に対して中立的立場にあったことを明らかにしている。

引用文中に誤字脱字が散見され、また、偏った意見を述べている箇所もあるが、膨大な量の先行研究をきちんと踏まえたうえでオリジナルな見解を論理的に展開しており、フォークナー研究を大きく前進させた論考として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)